黒歴史短篇集

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒歴史短篇集

【Ｎコード】
Ｎ３５７２Ｘ

【作者名】
キリ

【あらすじ】
放課後の化学実習室。黒いカーテンのひかれた窓の外ではしきりに雨が降っており、薄暗い室内にはどこかさびしい雨音だけが聞こえていた――高校卒業して、短編小説のようなものをいくつか書いていた時期がありました。
飽きやすい性格なので、三ヶ月くらいで止めたんですが、そのとき書いていたヤツが出てきたので、パソコンから消す前にいくらか加筆修正を加えて上げることに。
ＳＦやらホラーやらギャグやらと、ジャンルは適当です。

隠れ鬼

1

放課後の化学実習室。黒いカーテンのひかれた窓の外ではしきりに雨が降っており、薄暗い室内にはどこかさびしい雨音だけが聞こえていた。

「コイシザクラ？」

「そう」

語り手である目の前の少女は、誰ともないその言葉に静かに頷くと、低くした声を雨音にかぶせるようにして続ける。

「……これは前に、卒業した先輩に聞いた話なんだけどね。体育館裏のプールに向かう途中の銀杏並木に、一本だけ桜の木があるじゃない？　あれがそう呼ばれているらしいんだけど……あそこに、でるんだって」

彼女はそこで、一度言葉を切った。

「……何十年か前にあの体育館裏の桜の下で、ある女生徒が新任の男の先生に告白したらしいのね。でもまあ、やっぱりというか告白は失敗。彼女はフラレてしまうわけよ。それでも彼のことを諦めきれなかったその娘は、彼の家までつけまわしたり、彼と自分との関係で思い込みともいえるような噂を流したりして――まあ、今で言うところのストーカーみたいなことをしていたらしいのよ。でね、困ったのは先生の方。彼自身は非常にまじめだったし、その女生徒というのが以前から虚言癖というか、問題行動が多かった娘らしくてね。大多数の生徒や先生方はそんな噂をまるで信じてはいなかったのだけれど、彼にはこのとき将来を約束した婚約者がいたの。だから、正直そうやってあとをつけられたり、少しでも誤解を招くような噂を流されたりするのは迷惑だった。それで、今度は先生の方

がその場所に彼女を呼び出したらしいの。もちろん、彼女を説得してそうした行為を止めさせるためにね」

雨の音が強くなる。

「そうして、彼は彼女に言ったわけよ。――自分には愛した人がいる。迷惑だから止めてくれ、って。でも彼女は聞き入れようとはしなかった。逆に婚約者の話を聞いた彼女は、その人がいるために自分とはつきあえないのだと思い込み、今度はその婚約者の彼女に手を出すといってきたの。さすがにそれには声を荒げた先生と彼女は、口論になった末にちょっとした揉みあいになって、その際に誤って倒れた彼女が桜の幹に後頭部をぶつけてしまい――」

「……死んじゃったの？」

「うん。それで慌てたその先生は、彼女を桜の根下に埋めることにしたの。ちょうどその頃は冬場で人が来ることはめったになかったし、何より先生には結婚を控えた大切な人がいたからね。それでまあ、その日から彼女は行方不明。以前から彼女は素行に問題があるとされていたため、しばらくして警察も家出ということで捜査を打ち切ることにした――」

誰も口を開くものはいない。雨のせいだろうか、少しだけ空気が冷たい。

「……話はここから。捜査が打ち切られてから二週間くらい経って、ある噂が流れ始めたの。体育館裏の桜の下で、行方不明になった彼女を見たっていう噂が。慌てたのは先生ね。まさかそれが本人であるはずがないし、よしんば誰かの見間違いや勘違いだったとしても、噂が広まれば誰かがそこを調べる可能性は十分にある。そうなれば、警察に見つかるのも時間の問題だった。だから彼は人目のつかないように深夜、彼女の遺体を掘り返して別の場所に埋めることにしたの。それでいざ掘り返してみると、彼女の遺体がなかなか見つからない。記憶違いも考慮して広めに穴を掘るのだけれど、どこにも彼女の遺体は見つからなかった。もしかしたら彼女は生きていて、自力で土の中から這い出ていたんじゃないか――そんなありえないよ

うなことすら彼が思い始めたとき、声が聞こえたの」
真紀は、ことさら低く震えるような声で、
「つかまえた」
「きゃっ！」
真正面に座っていたあたしは、彼女に腕をつかまれ思わず声をあげてしまう。
「……先生も今のミヤみたいにびっくりして、急いで穴から出ようとしたの。でも、なぜか足が動かない。ゆっくりと視線を下に向けると、地面の中から伸びた白い腕が彼の足をつかんでいたんだって。地面の中に引き擦り込まれながら彼が最期に目にしたものは、満開に狂い咲きした桜の姿だった……」
あたりがしーんと静まりかえる中、雨の音だけがさびしい。
「それからよ。毎年その時期になると、体育館裏の桜の木が季節はずれの薄い紅色の花を咲かせて、そこに行方不明となった女生徒と男性教諭の姿が目撃されるようになったんだって――」
真紀が口をつぐむと、一斉にため息が漏れた。
「――はあ」
「まあまあ、ね」
「あは、ミヤたったら可愛いんだから」
「あ、あれは真紀がいきなり手を握るからびっくりしただけで……！」
みんながどっと笑う。
みんなといっても、あたしを含めてこの場には四人しかいない。本来ならとっくに帰宅している時間なのだが、昼ごろから降り出した雨のせいで今のところこうして待機中というわけだ。そのまま何もしないでいるのも暇なので、こうして怪談会を開こうということになったしだいである。
ちなみに、会場である化学実習室はあたしが部長を務める化学部の部室だったりする。まあ、一週間に一度しか活動していないため、よくこうして溜り場として使用しているのだが、それはそれ。部長

の特権というやつである。
「真紀、アンタいい加減いしないと次にいけないでしょうが」
あたしの隣りに座るカコが、いまだに笑い続けている真紀を注意してから、その隣りの奈緒を指差す。「ゴメン、ゴメン」と真紀が平謝りしてから少し、場が静かになるのを確認してから、奈緒がいつもより低いトーンで話し出した。
「そうね。それじゃあ、私は隠れ鬼について話すわ」
「それって、隠れ鬼ごっこのこと？」
隠れ鬼ごっことは、かくれんぼと鬼ごっこを組み合わせたような遊びで、あたしが小学生の頃に流行った遊びだ。初めにかくれんぼのようにどこかに隠れるということ以外、基本的には鬼ごっこと変わりがない。
そんな子供の遊びに、何か怖い逸話でもあるのだろうか？
「いいえ。鬼隠しとも言うらしいのだけれど、これはいわゆる都市伝説のひとつなの。こういう怪談話をしたあとで、一人、また一人と姿を消していくっていう話なんだけれどね」
場の空気が、また緊張をはらんだものに変わっていく。
「……何ていうんだろう。昔からこういう話をしていると本物の何かを呼んでしまうとかって、よく聞くでしょう？　ほら、百物語とか、怪談をしながら行灯の灯心を消していって、最後のひとつまで消えたとき何かが起こる――みたいな。これもそのひとつ。こうやって怪談話をしたあとにね、どこからともなく声が聞こえてくるんですって。『もういいかい……』って」
雨の音に混じって、誰かの息をのむ音が聞こえた。
「その声が聞こえたときは、絶対に『はい』とか『もういいよ』とかって肯定をしてはいけないの」
「どうして？」
「その声の主が、その人を捜そうとするから」
「……見つかったらどうなるの？」
「消える――ていう噂ね」

雨の音が、一際大きくなったような気がした。
「その声の主というのが――」
「――いやっ！」
ガタン、という椅子をひく音。
話の途中で、誰かが悲鳴をあげる。
「どうしたの？」
悲鳴の先である真紀が、あたしとカコの背後を震えながら指差し、
「あそこ、く、首が浮かんでる……！」
そう言った。
――て、生首っ！？
嫌な汗がじっとりと背中を伝う。しかしだからといって、振り返らないわけにもいかず、あたしは真紀の指差す方へと恐る恐る視線を向けた。
高い位置にある窓付きの換気扇。
そこに、確かに何か大きなものがごそごそと蠢いていた。黒い何かは行き場を求めるように羽ばたいて――て、ちょっと待て。
……オイオイ、お嬢さんや。ありゃあもしかしなくても、
「蛾、ね」
カコが白けたように言った。
そう。確かにそれは大きさこそ普段見かけるものよりも若干大きめではあるが、まぎれもなく一匹の黒い蛾の姿であった。
「……」
ぷ。
くくっ。
「あはははは……！」
あたしは堪えきれずに笑った。だって仕方がないじゃない？
「……さ、さっき人のことあれだけ笑っておいて、真紀ったら自分は真剣な声で叫ぶんだもん……それも、ぷっ……首、首って……！」
いくら室内が暗いからとはいえ、そりゃないでしょ。
むむ、いかん。どうやらツボに入ってしまったらしい。笑いの波

が一向にひこうとしない。
みんなもつられたように笑い出す。
真紀はというと、ひとり茹でたタコのように真っ赤になって俯いていた。
うんうん。人を笑うものは人にも笑われる、ってね。
人間、怖いと思っているときには怖いものをみるもんだ。

2

「さて、次はあたし……だったんだけど」
カコはイスから立ち上がると、ぐるりとあたしたちを見回す。
「なーんか、そんな雰囲気じゃなくなっちゃったわね。本当ならあたしのとっておき、トイレの花子さんの話をしてあげようと思っていたんだけど」
「何それ、シャレのつもり？」
カコというのはあだ名で、彼女の名前は高倉華子。一応、このメンバーの中ではあたしともっとも付き合いが長く、小学生の頃からの親友である。そのころから「華」という字を音読みしてカコと呼んでいたのだが、本名はハナコ。どうやらそれに引っかけて話すつもりでいたらしい。けっこう几帳面な彼女のことだ。いつか機会があったらと、密かに調べていたのだろう。彼女は「ウハハハ」と豪快に笑うと、少し照れたように頬を掻いた。中学のときは陸上のキャプテンをしていたため男勝りなところのある彼女だが、こうして照れているところは可愛いと思う。
まあ、確かに。
二度も間に笑いを挟んでしまい、正直場の空気は緩いものとなってしまっている。ここでまた怖い話をしろというのも、酷な話だろう。
「というわけで、提案。ここいらでトイレ休憩としましょう」
トイレの花子さんならぬ、トイレに行こうとする華子さん。

うーん、イマイチ。
「誰か他に行く人いる？」
手を上げたのはあたしだけ。
「よし。ちょっくら行ってくるから、二人はここで待っててね」
残る二人に手を振って、あたしとカコは一路トイレのある三階へと向かった。
化学実習室は北棟の四階奥にある。こちらは主に特別教室が並んでいるためトイレが設置されておらず、三階の中央通路にあるトイレがここからはもっとも近い。
二人して階段を下りていくと、突然踊り場でカコが立ち止まった。
「あ、ゴメン。ハンカチ鞄の中だわ。すぐ取ってくるから下りて待ってて」
「うん？　いいよ」
カコが一段抜きで階段を駆け上がる。
おお、さすが中学は陸上部。速い、速い。
……にしても。
あたしは三階まで下りると、ぼんやりと廊下の奥を見つめた。
外が雨ということもあるだろうが、まだそんなに遅い時間帯というわけでもないのに、校内はずいぶんと暗いように見える。
さっきまであんな話をしていたせいだろうか。
いつもの校舎、いつもの廊下なのに、なんだか異世界に迷い込んでしまったかのような気分。
『消える――ていう噂ね』
脳裏を奈緒の言葉が過ぎる。
さきほどの話ではないが、人気のない廊下にこうして一人で立っていると、まるで自分以外の人間が消えてしまったかのような錯覚に陥ってしまう。
いや。もしかしたら消えてしまったのは――。
（……ぃ――……）
ん？

「お待たせ」
後ろから肩をつかまれて、少しだけ後ろによろめく。
「どうしたの、ボーッとして。もしかして一人になって怖かったかにゃ？」
ニヤニヤといやらしい笑いを浮かべるカコ。
ぬぅ。コイツは……。
「全、然。それより早く行くわよ」
あたしは肩の上に置かれたカコの手をつかむと、強引に引っ張りながら目と鼻の先に見えるトイレへと向かって歩き出した。
「あっと、ちょっと待ってよ」
（――――……）
あれ？
あたしは立ち止まり、背後を振り返る。カコが不思議そうにあたしの顔を見つめた。
「ん？　どうかした？」
「……いや、何か聞こえなかった？」
「ちょ、やめてよ。変なこというの！」
特にそれ以上何か聞こえてくるということはない。
どうやら空耳だったようだ。
……うーん。
真紀に腕をつかまれたときといい、実はあたしって結構小心者なのかもしれない。

3

トイレの内側は雨の音すら聞こえてこないほど静かで、タイル張りだからだろうか、空気が若干冷たかった。カコが一番手前の個室に入るのを見て、あたしはそこからひとつ空けて奥の個室へと向かう。
それから少しして、

「――何て言ったの？」
トイレの個室越しにカコが突然そんなことを言った。
「は？　何か言った？」
「え？　そっちが何か言って――」
ないよ？
……。
次の言葉を待つが、何も言ってはこない。何だか緊張しているような感じ。
「どうかしたの？」
「……もういいよ」
はあ？　いいーんかい。
たく、自分から話を振っておきながらそれってどうよ。まあ、別にトイレの個室越しにわざわざ話する必要もないんだけどさ。気になるじゃん。
ん？　ハハーン。
なるほど、そういうことか……。
「――もしかしてカコ、さっきあたしが何か聞こえるとか言ったから、急に怖くなったんでしょ？」
……しーん。
むう？
慌てるでもなく、否定するでもなく。一向に言葉が返ってくる気配はない。
ちょーっと待てよ。
あたしはレバーを下げて水を流すと、彼女の入った個室へと向う。
「おーい、カコ？」
ドアをノックしようと手を伸ばしかけたとき、ゆっくりとドアの方から内側へと開いていった。
……え？
はたしてそこに、カコの姿はなかった。
――て、ちょっと待って！

別の個室にもいないよね？
それとも何、アイツ先に一人で戻ったわけ？
そう思ってトイレの入り口へと目をやりかけたとき、何かが視界の隅に映った。
シンプルなチェック柄のハンカチ。
……カコのものだ。以前使っていたのを見たことがある。手に取ると、確かにそこにカコの名前が書かれていた。
それが、どうして個室の内側に落ちているわけ？
もし先にトイレから出て行ったのならば、手を洗ったときに気づいたはずだ。わざわざ教室まで取りに戻ったのだから。
というよりも、この状況はまるで――消え、た……？
ふいに背筋が寒くなる。
いや。
そんな、そんなこと――
「……あるはずない！」
自分に言い聞かせるようにしてハンカチを握り締めると、あたしはトイレの外へと出た。
「カコ？」
もしかしたらと思い周囲に目を配るも、カコの姿は見当たらない。ぐっと唇を引き結ぶと、あたしはもと来た道を走り出していた。
廊下を走る。四階への階段を一段抜きで駆け上がり、一番奥の化学実習室へと向かう。
大丈夫。きっと戻ってきているはずだ。
教室の前まできて呼吸を整えると、思い切ってドアを開けた。
教室の中は、出ていく前と何ら変わった様子はないように見える。
流し台つきの白いテーブル。置かれたままにされたカバンや荷物。
ただ、そこに持ち主の姿だけがない。
「ウソ……」
教室の中に入る。
――どこかに隠れている、とか？

いや、教室の中に隠れられるような場所はない。ここを出て他の場所に隠れるといっても、周りは特別教室ばかりで鍵もかかっている。いくらカコの足が速いからといって、実習室は階段から離れた一番奥にあるのだから、二人を呼び出してから隠れられる場所に行くまでに、どこかで走ってきたあたしと鉢合わせになるはずだ。

ふいに、奈緒の話とトイレでのカコとのやり取りを思い出していた。どこからか聞こえてくる声。カコはいなくなる前になんと言っていたか？

「まさか……」

呟いたときだった。

（……ぃ――……）

何かの音が――どこからか声に似た音が聞こえた気がした。

（――かぃ……）

……いや、気のせいではない。

今度は、はっきりと聞こえた。

「もういいかい？」

全身から血の気が引くのがわかった。

心臓が早鐘を打つ。

ふと、背後から何かが近づいてくる気配がした。それは、あたしの背中にピッタリと寄り添うように立ち止まると、

「もういいかい？」

その瞬間、あたしはヘタリと床に座り込んでしまった。振り返ることなんてできやしない。身体がウソみたいに震えた。声が声にならない。引き攣ったような音だけが喉の奥から漏れ出た。

怖い！　助けて！！

南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経、臨兵闘者皆陣列前行、天にまします我らの父よ――あと何があったっけ？　ウチはお祖母ちゃんの代から仏教は浄土真宗を信仰しているのだが、この際助けてくれるのならどんな神様でもよかった。

人間切羽詰ってくると、ある種開き直りというか、余裕が生まれ

るもので。それでも、未だに声を出すことだけはできなかった。
「……？」
それにしても、だ。さっきから結構時間が経つのだが、想像していたような恐怖が一向に訪れる気配はない。もしかして助かったのかも、と思ったとき。
「――ぷ」
ぷ？
「あっはははははっ！！」
どこか聞き覚えのある笑い声。
「ふふ、ゴメンなさい」
「あ、あたしはやめようっていったんだよ？」
ぞろぞろと馴染みのある声が続く。
まさか。
ギギギッとまるでロボットにでもなったかのように、あたしは背後を振り返る。
すぐ後ろに、お腹を抱えて笑うカコ。そのさらに後ろ、教室のドアの前に奈緒と真紀の姿があった。
……コンチキショウ！

4

「ゴメンってば、ミヤぁ」
あれから気がつけば雨もやんでいて、あたしたちはそろって下校することにした。
というより、あたしが怒って先に帰ろうとしたのをあとの三人が追いかけてきた、というのが正しい。
「もう、ほんっと信じらんない！」
「だからゴメンってば、ね？」
「――福家堂のクリームあんみつ」
「……うっ。わかったわよ。しょうがないわね」

そう言って、カコは自分のお財布の中を確認する。
この程度で許してやろうってんだから、あたしも心が広いもんだ。
――種明かしをすれば、実に簡単なことだった。
まず、ハンカチを取りに行くと見せかけて二人に教室の外に隠れるよう伝える。そうして、自分は一端トイレの外に隠れてあたしをやり過ごしてから後をつけてきたというわけだ。他の教室に鍵がかかっていることも計算ずくだったとか。
全く、こんなときだけ頭が回るんだから。
……ん、鍵？
「――あっ！？」
あまりに腹が立っていたため勢いで出てきてしまったが、あたしってば実習室の鍵を閉め忘れているじゃないか。
まずい。先生にバレたら怒られてしまう。
……むぅ。仕方ない。
「ゴメン、先に行ってて。すぐ追いかけるから」
そう言うと、あたしはひとり実習室へと戻るのだった。

そういえば、とあたしは三階の踊り場でふと立ち止まる。
「ここで聞いた声も、そうだったのかな？」
あのとき聞いたかすかな声。もしかすると、ハンカチを取りに行くふりをして二人に隠れるよう指示したときに、カコが二人のどちらかに言わせたのかもしれない。
もしそうであるならば、どこまで用意周到なんだか。
（……ぃ――……）
ふと、どこからか声が聞こえたような気がした。
……やばっ、見回りの先生かもっ！
見つかって不都合というわけではないが、こんな時間まで何をしていたんだと足止めされるのは勘弁して欲しい。
あたしは急いで残りの階段を駆け上り、化学実習室へと向かった。
「鍵は、と」

カバンを広げ、鍵を探す。
（――かぃ……）
ごそごそとカバンを探る中、その声は聞こえた。
（もういいかぃ）
……。
またか。――たく、先に行くよう言ったのに。
「もうそれはいいから！」
さすがに二度も同じ手を喰うわけにはいかない。あたしは無視を決め込んで、そのまま鍵を探す。ようやくそれを見つけ教室に鍵をかけたところで、背後からペタリ、ペタリと誰かが近づいてくる音がした。
（もういいかぃ）
あー、もうっ！　しつこい！！
いい加減腹に据えかねたあたしは、
「もういいって言ってるでしょう！！」
そう言って、振り返る。
それは、人のような姿をした何かだった。
何か？　何かだ。
人のようなかたちをしているものの、こんなのが人であるはずがない。大きく窪んだ目に、頬まで裂けた口。そいつは、確かに笑っていた。
人でないならば、一体何なのか？
あえていうならば、そう。それは――鬼だ。
そいつは、あたしの腕を強く締め上げると、顔を寄せてからはっきりとこう言った。

みぃつけた

『――その声の主というのがいわゆる鬼というやつで、みつかると食べられてしまうんですって』

隠れ鬼（後書き）

まんま小野先生の悪霊シリーズのぱくｒ……いや、このころ借りて読んだ「悪霊だってヘイキ！」に感動して書いたオマージュ作品です。

確か、６０００文字以内とか何かしばりがあって書いた覚えがあります。

結局、これを書いて自分には才能がないと諦めたんだったんじゃないかと。

一応、起承転結とか考えて書いてます。

このオチけっこう気に入ってたり。

うおぉ、悪霊になりたくないで同じサブタイトルがあった……。偶然です。

王様のお鍋

むかし、むかし、あるところに、王様がいました。王様はグルメで、毎日、毎日、美味しいものを食べていました。やれフランス料理やら、やれ満漢全席やら。古今東西あらゆるぜいたくなものを食べつくした王様は、ある日、兵士たちが話しているのを耳にしました。

「きのうの夕食、何を食べた？」

「お鍋だよ。近ごろ、めっきり冷えてきたからな。」

はて、お鍋とは一体どんな食べものなのか。王様は首をひねります。

「寒い日にキューと一杯やりながらつつくお鍋は、最高だものな。」

「世界で一番美味しい食べものだよ。」

カカッと兵士たちは笑います。

「なに、そんなに美味しい食べものなのか？」

と、王様はキッチンへと急いで向かいます。そこで王様、料理長にお鍋を持ってくるように命じました。あわてた料理長、カニにイセエビ、ホタテにアワビとぜいたくなお鍋を用意します。

「うむ。たしかにこれは美味しい。しかしこれが世界で一番なのか？」

それを聞いた料理長、お鍋にはたくさんの種類があることを話します。

「ならば、世界で一番美味しいお鍋とはなんゾ？」

王様の問いに、料理長は考えます。

「それはやはり、親しい人たちと囲むお鍋ではないでしょうか。」

親しい人たち。王様は考えます。料理に熱心だった王様に、お后様はいませんでした。とうぜん、子供もいません。さて、どうしようかと考えた王様は、お城の兵士や侍女たちを呼びよせ、みんなで

お鍋を囲むことにしました。
しかし、あまりにたくさんいたので、ぜいたくなお鍋は用意できません。白菜にトリ肉のお鍋です。それでもみんな、「美味しい、美味しい。」といって食べています。
王様も一口食べてみました。
「これは美味しい！」
それはこれまで食べた何よりも、美味しい食べものでした。どうしたことか、笑顔がこぼれます。今までどんなに美味しいものを食べたときも、これほど心が温まったことはありませんでした。
そこで、王様は気づきます。
「何を食べるかではなく、誰と食べるかで料理とは美味しくなるものなのだ！」

※

「――で、それとウチの夕食が三日連続鍋であることと、どういう関係があるわけ？」
僕が冷ややかな調子でそう言うと、母親はキッチンミトンを外して、「ホホホ」と口に手を当てて笑う。
「何言っているの息子よ。世界で一番美味しいものを三日も連続して食べられるなんて、幸せじゃない。しかも、愛しいママと一緒に食べられるのよ？　全然問題ナッシング！」
ぬけぬけとそんなことを言う母親に対し、僕は傍で寝そべっている愛犬に囁いた。
「一緒に食べる人にこそ、問題があるよなぁ」
「何か言った？」
耳聡く、母親がにこやかに笑いかけてくる。
「いいえ、何でもございません。お母さま」
せめてカニにイセエビ、ホタテにアワビの鍋だったらいいのになぁ。……白菜と鶏肉団子の鍋を前に、そんなことを考えながら、僕

は両の手の平を合わせた。
『いただきます』

王様のお鍋（後書き）

むかーし即興で作った童話みたいなお話です。
ちょうど三日間鍋食べたんで。
やっぱり鍋には日本酒です。（ 。д 。）ウマー

ゴーストハント　偶然と必然

「よお、麻衣に少年。まーた今度の依頼も学校だって？」
「あっ、ぼーさんだ。久しぶりー」
「そうなんですよ。まあ、ウチの依頼主ってほとんど紹介の紹介ですからねぇ」
「最初に受けた依頼が、あたしんとこの学校だったからさぁ」
「ああ、そうだっけな。必然、学校関係者が多くなるってわけか。――そういや、この間の事件の時に広田のヤツにも話したんだけどさ」
「広田って、東京地検の広田さんですか？」
「――あっ、広田さんといえば、笹倉さんたち不起訴に持ち込めたんだって。この間わざわざオフィスに寄って教えてくれたんだぁ」
「ほー、そいつはよかったな。……じゃなくてだ。その東京地検の広田にも話したんだけど、最初の学校の依頼主がさ」
「校長先生？」
「そう。お前んとこの校長がさ、すげーなあって話をしたんだよ」
「すごい？」
「テレビでも有名な真砂子ちゃんはともかくとしてだ。集めた霊能者ってのが、最初に依頼を持ちかけたナル坊に加え、俺や綾子にジョンだぞ？」
「どういうこと？」
「ああ、滝川さんはこう言いたいわけですね？　当たりを引きすぎてると」
「そういうこと。よりによって本物ばっか。綾子はともかく、俺やジョンは必要なとき以外、霊能者だってなるべく人に話さないようにしてるのになー」
「確かに、前に諏訪のお屋敷の事件のときも、たくさん霊能者って

集められてたけど、別人とかもいたしね」
「ああ、滝川さんの大好きなウチの所長の偽物ですか」
「もう勘弁してくれ。――でもな、普通はそんなもんなんだよ。自分で言うのもなんだが、霊能者ってのはともかくペテン師が多いもんなんだ」
「そんな感じではありますねぇ」
「そっか。そう考えると確かにすごいよね。――もしかして、あれじゃないかな？　潜在的なＥＳＰ」
「あのおっさんが？　まさか」
「それなんですが……」
「うん？　もしや少年もあのおっさんがＥＳＰだとでも？」
「そのおっさんがどんなおっさんなのか、僕は会ったことないのでわかりかねますが。おそらく違うと思います」
「じゃあ、やっぱり偶然かな？」
「いやいや、そうとばかり思えないことがありまして」
「どういうことだ？」
「それには少しばかり、確認をしておきたいことがあるんですが。みなさんが初めて出会った谷山さんの学校の事件なんですが」
「旧校舎の？」
「はい。それって結局、原因は地盤沈下だったんですよね？」
「うん。そだよ」
「ふーむ」
「それの何が問題なんだ、少年？」
「いえね。それじゃあ何で、渋谷さんは滝川さんたちを信頼したのかなあって」
「信頼？　ナル坊がか？」
「いやだってそうじゃないですか。毎回、事件の度に呼ばれているし、ほら、さっき話してた諏訪のお屋敷の事件のときも、『信頼しているのはこのメンバーだけだ』って」
「んなこと、確かに言ってたっけな。だけどもそりゃあ、俺達に実

績があったからだろ？」
「でも最初の事件のとき、みなさんは誰も役に立たなかったわけでしょ？」
「そう言われると、まあ……」
「まるで、最初から力のある霊能力者であることは知っていた、みたいな感じじゃありませんか？」
「――いやあ、待て待てっ！　いつだったか……あの人形の、ミニーの事件のときはどうだ？　あのときは俺も綾子も別々の依頼人から依頼を受けて、そこで偶然ナルたちと再会したんだぞ？」
「その事件のとき、他の方たちはどうでした？」
「他って……ジョンと真砂子はあとから呼び出して……」
「どうやって連絡を？」
「えっと、それは……」
「ナル坊のヤツが……」
「……」
「……話を変えましょう。渋谷さんは、谷山さんの学校の事件の依頼を受ける三ヶ月前に来日したんですよね？」
「えっ？　うん。まどかさんに聞いた限りだとそうらしいけど……」
「その三ヶ月間、渋谷さんは何をしていたんでしょうね？」
「何って、そりゃあ兄貴を探してたんだろう？」
「まあ、それはあるでしょうね。それが目的ですから」
「他に何かあるの？」
「ええ。このＳＰＲの分室を日本においた理由はリンさんがおっしゃっていましたが、分室を置く名目としては、日本の心霊研究の現状と心霊現象の調査――というのが必要だったわけですよね？」
「らしいね」
「心霊現象の調査。――以前はきっと、お兄さんが一緒にやられてたんでしょう」
「ずいぶん有能な霊媒師だったらしいからなぁ」
「ただそうなると、日本で調査をする際には非常に困ったでしょう

ね。そのお兄さんが亡くなられて、渋谷さん自身もサイキックとして力が使えない。――今までの事件を考えるとやっぱり、リンさんひとりではキツイでしょうし」
「お前、まさか……」
「はい。もしかすると、変わりの――こう言ったらあれですけど、使える霊能者を探していたんじゃないかと。渋谷さんには、サイコメトリーって力もありますしね」
「……」
「……」
「……前々から思ってたんだよ」
「またまたー、さっきあんなに否定してたじゃん」
「じゃなくてだな。事件のときに、何でナルは毎回綾子も呼ぶんだろうかって」
「そりゃちょっと酷いんでないかい？　綾子は樹の力を借りて浄霊することができるんだし」
「まあな。それを知ってからは、俺も納得したんだが。――逆に言うと、それを知らんで綾子を呼ぶ理由がわからない」
「綾子には悪いけど、確かに……」
「みんなでいるのが好きで、ってのはないでしょうねぇ……」
「ナルだからなぁ……」
「……でもまあ、だからといって何かが変わるわけでもないし」
「そりゃま、そうなんだけどな。さすがに今更だし」
「どうします？」
「何が？」
「直接訊いちゃいます、本人に？」
「いや、そりゃあ、やめとこうや。俺、これ以上人間不信になりたくないもん」
「確かに」
「そりゃそうだ」
「――いつまでしゃべってるんです？」

「ナル！」
「……ぼーさんが来たのなら、さっさと行くぞ」
「アイアイ、サー」
「あっ、ぼーさん、そっちの機材運んでー」
「はいよ。じゃ、行くとしますかねぇ」
「ゴースト・ハントに――」

ゴーストハント　偶然と必然（後書き）

けっこう昔、まだゴーストハントの長編を書いていなかった頃、十二国記に特別編として載せた短編というより掌編といつた小話です。消しちゃってましたが、一応また上げとこうかと。こういう会話だけの文も好きだったりします。

パラサイト・シングル

何がいけなかったのでしょう。

私は一生懸命頑張ってきたつもりでした。夫と結婚してからの三十年、家事に育児にと自分なりに努力をしてきました。とくに子供の教育には力を入れており、厳しくしすぎてしまったきらいもありますが、さりとてそれも子供への愛情としてやってきたのです。

息子もそれを理解しているものと思っていました。

現に中学でも高校でも息子は常に上位の成績を維持していましたし、私たち夫婦に対して不平不満をいってくることもありませんでしたから。

本当に自慢の息子で――。

今思えば、それこそが間違いのはじまりだったのかもしれません。

大学に入学してから少しして、突然息子が自室から出てこなくなるということがありました。それまでも大事な試験の折などには、一週間ほど部屋にこもることはあったのですが、一ヶ月以上も続いたというのはこのときがはじめてです。

それまでは勉強の妨げになるだろうとの配慮で部屋には入らず、食事も部屋の前に置いていたのですが、さすがにこのときばかりは心配になって息子の部屋のドアを開けることにしました。

……茫然自失、というのでしょうか。

私の頭の中は一瞬にして真っ白になってしまいました。

それというのも、しばらく入っていなかった息子の部屋は、以前と比べてはるかに様変わりしていたのです。

天井や壁、いたるところに貼られた女の子の絵のポスター。本棚に収まりきらなかったのか、板張りの床に積み上げられた教科書や参考書ではない本の数々。ベッドの周りや、机の上に整然と並べられた人形やロボットなどの玩具の群れ。

一体どうしてしまったのかと問いかける私に、息子はひどく乱暴な言葉で私を部屋から追い出しました。
夫は、何もいってくれませんでした。それまで仕事一筋に生きてきた人です。変わってしまった息子に、どう接したらいいのかわからなかったのでしょう。
――そのうち、息子は大学も辞めてしまいました。
それから、私たち家族の運命の歯車は狂いはじめたのです。
息子は日がな一日暗い部屋の中に引きこもり、漫画やテレビアニメばかりみるようになりました。そして気に入らないことがあれば、幼い子供のように大声で暴れ回り、だんだんと暴力まで振るうようになってきたのです。
夫はますます家庭に無関心となり、仕事にのめりこんでいきました。
結局のところ、私には他に方法がなかったのです。
十年以上ものあいだ働きもせず暴君と化した息子と二人暮らすうち、心身ともに疲弊しきっていた私は、夫のゴルフクラブを手に、二階の息子の部屋へと向かいました。
一段、一段、軋みを立てる階段を上りながら懐古していたのは、昔の楽しかった思い出です。
何がいけなかったのでしょう。
記憶の中の家族はいつも笑顔でいたというのに。
部屋の前まで来ると私はそっとドアを開け、ベッドの上で横になる息子の頭上にゴルフクラブを振り上げ――。

すべてが終われば、私も後を追うつもりでした。
しかし、事を終えた後バスルームで手首を切って意識を失っていた私は、帰ってきた夫に発見され一命を取り留めてしまったのです。
私は、罪を償うことになりました。
そうなってから、夫はたびたび私のもとへとやってきました。おそらくその頃には、私たち家族の内輪事情がマスコミによって世間

一般に大きく取り上げられていたことでしょう。夫はそんな素振りを見せたことはありませんでしたが、きっとたくさんの迷惑をかけたに違いありません。

だからこそ、私は何度か夫に離婚を切り出しました。

しかし、そのたびに夫は私を励まし続けてくれました。自分が悪かったと、これからまた二人でやり直していこうと、そういってくれたのです。今こうして私が出所してからも生きていこうと思えるようになったのは、ひとえに夫がいるからに他なりません。

……ですが神様は、実の息子を手にかけておきながら、のうのうと生きていこうとする罪深い私を許そうとはしなかったのでしょう。

「おい、ババァ。腹減った」

昔から変わらない息子の声。

「冷てぇ、何やってんだよ！」

その声に私は「ごめんなさい」と謝りながら流し台の水を止め、夕食の準備を急ぎます。

そうです。息子はいまだに私の傍にいるのです。

自ら剃刀を押し当てた左腕の手首。そこに残った傷跡は、私が服役し、罪を償う間にもどんどんと大きくなり変貌し、やがて出所するころにはひとつの形を成しました。息子の、顔です――。

ああ、何がいけなかったのでしょう。

パラサイト・シングル（後書き）

人面疽の話です。
自分的にはけっこう好きな話しなんですが、酷評された覚えがありますw
でも今の若い人はパラサイトシングルなんて言葉知らないだろうなぁ。

竜殺し

湖畔に映る、蒼い月が揺らぐ。
「……何か用か？」
砂利を踏み鳴らし近づいてきたのは、エヴァンとかいう蛮族の女戦士だった。
獅子を彷彿とさせる逆立った赤毛に、金色の鋭い双眸。獣の皮をなめして作られた衣服から、無駄な肉のない引き締まった身体を惜し気もなく夜風にさらしている。
「そんなところにいないで、あんたもこっちにきなよ」
エヴァンが顎をしゃくり上げた先には、二人の男たちが火を囲み、笑い声を上げながら酒を酌み交わしている姿があった。
「もしかしたら、本当に最後になるかもしれないんだ。いいだろう？」
そういって俺の肩に回す腕には、断るとへし折るとでもいいたげに軽く力が込められている。俺は頭を振ってから、慎重に言葉を選ぶようにしていった。
「……竜は強い。気を引き締めたほうがいいんじゃないのか？」
「馬鹿だね」
エヴァンは半ば強引に腕を絡め立たせると、「だから飲むんじゃないか」と快活に笑った。

パチパチと爆ぜる焚き火の前で、俺たち四人は腰をおろしている。
オルガ地方山間にある小さな湖の畔。もう少し行けば、荒涼とした岩場が広がり、そこに目的の竜の巣はある。
「とうとう明日か……」
一通り笑い、酒の席での話題が尽きかけたころ。ロイチェルがおもむろにそう呟く。

彼は聖王国の神殿騎士だ。黒髪を短く刈った、精悍な顔立ち。今は鋼の鎧を脱いでおり、鎖かたびらの下のがっしりとした体格をあらわにしていた。
その鍛え上げられた身体が、わずかに震える。
「何だ？　恐いのか？」
それを見たレイブンが長い金髪をかき上げ、揶揄するように笑った。
紫の長衣で長身痩躯を包んだ彼は、戦士ではなく魔術師である。なめらかな鼻梁に、確かな知性を感じさせる翠の瞳。しかし、その飄々とした物腰や言葉尻からは、浮ついた街の青年を想起させられる。
同年代であるとのことだが、まるで対照的な二人であった。
「うるさい。武者震いだ」
そういって、ロイチェルは大きく酒を呷る。
「貴公こそ、声が震えていたぞ」
その言葉に、今度はレイブンが酒を呷った。
「俺のは酒の飲みすぎだよ」
「わかっているのなら、少しは控えるがいい」
「テメェには関係ねぇだろ」
「貴公のへまに巻き込まれるのは御免だからな」
お互い睨みあったまま動かなくなる。湖から吹く強い風に、炎が踊った。
「なんで――」
これまで会話に参加することのなかった俺だが、そんな彼らを見て思わずこれまで黙っていた疑問を声に出してしまう。
「なんであんたらはそうまでして竜を殺そうとするんだ？」
その疑問に、三人は顔を合わせ、
「王都で今、流行病が広がっていてな。その妙薬として、なんとしても竜の胆を手に入れたい」
実直に答えたのは、ロイチェルだった。

「俺は魔術の触媒として竜の目玉が欲しくてだな。……魔術っていうのは金食い虫でね、必要のないものはもちろん金に換えるけど」
レイブンが笑いながら続ける。
「私は単純に強いものと戦ってみたい。自分がどれだけ強いのか試してみたい。好奇心だな」
エヴァンが獣を思わせるような獰猛な笑みを浮かべた。
「……今まで竜を殺せたものはいない。俺の祖父さんの代からずっとだ。それでもあんたたちは行くのか、竜を殺しに」
俺がそういうと、エヴァンが代表するように、
「案内役(ガイド)はあんたの代で終わりだよ。別の仕事を考えておきな」

†

朝靄の立ち込めるなか、俺は小舟をだして湖の中間まで来ると、冷たくなった三人の遺体を放り込む。
酒に仕込んでおいた薬は、翌朝には屈強な彼らの体温を奪っていた。
「竜なんかいない。いないものは案内しようがないし、殺しようもないんだ」
だから、案内役が自分の代で終わることはない。
そんな俺の目には、白く濃い霧に巨大な怪物の影が映っていた。

竜殺し（後書き）

ファンタジーが好きです。てか、本当に書きたいのはファンタジーなんですが、自分の力量ゆえに中々書けません。
文章の練習に書いてみたものですが、どうにも暗いお話となってしまいました。

まあ、あんまり読んでる人いないし、いっか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3572x/

黒歴史短篇集

2011年12月15日01時26分発行